

12 国際麻酔科学史シンポジウム 第10回大会を開催して

牧野 洋¹⁾, 土手健太郎²⁾

¹⁾ 浜松医科大学医学部麻酔・蘇生学講座, ²⁾ 愛媛県立中央病院集中治療部

10th International Symposium on the History of Anesthesia (ISHA) は2022年6月16日から18日に開催された。10th ISHA はコロナにより翻弄され続けた学会だった。コロナ禍により当初の予定より1年延期されたが、開催を迎えても未だ、コロナによる日本への外国人の入国制限が解除されておらず、外国からの麻酔科学史研究者の入国は困難だった。加えて2022年2月24日にはロシアがウクライナへ侵攻した。日欧を結ぶ航空便は欠航や減便が相次いだ。航空機はロシア領空を避けるために、長距離の迂回を強いられ、飛行時間も延長した。このことは10th ISHA 参加への大きな心理的・物理的負担となった。海外からの参加者数が減ること予想されたため、10th ISHA は現地とwebのハイブリッド形式で開催されることとなった。

2021年4月19日、かねてから闘病中であった菊池博達先生が逝去された。菊池先生は日本の麻酔科学史研究のリーダーの一人でもあり、ISHA 日本招致への原動力となったなられた方でもあった。日本でのISHA 開催をとっても楽しみにされており、ご自身も無念であったと思うが、10th ISHA 開催委員会にとっても、その卓越した指導力と国際的な影響力をふるっていただくことができなくなってしまったことは、大きな損失であった。

10th ISHA は開催が危ぶまれた場面もあったが、2022年6月16日から18日に開催された。外国人の日本入国は難しい状況下ではあったが、英国麻酔科学史学会会長のDr. Alistair Mckenzie 先生をはじめ、数名の先生に海外から困難を乗り越えご参加いただくことができた。しかし、参加者の大半は日本人の麻酔科医師であり、参加総数は事前の見込みを大きく下回った。Webでのハイブリッド開催となったので、世界各国から演題提出をいただくことはできたが、「世界中の麻酔歴史家が4年に一度一堂に集う」というISHAの目的は残念ながら十分に果たすことはできなかった。参加者数・参加演題だけを見ると、残念な結果に終わったように見えるが、企画立案から開催まで、数多くの麻酔歴史家及びスタッフの皆様が情熱を注いでくれたため、非常に密度の濃い意見交換を伴う、素晴らしい学会となった。

10th ISHA に参加していただいた皆様、企画立案に助言をいただいた皆様、スタッフの皆様、後援をいただいた日本麻酔科学会、英国麻酔学会、米国麻酔学会及び10th ISHA に心を寄せていただいた皆さん全てに厚く御礼を申し上げます。